

4-1 築地地区（愛知県名古屋市）

1. 調査概要

(1) 調査趣旨

築地地区の歴史は 1907(M40)年の名古屋港開港に始まる。埋め立てによってまちは作られたものであり、その歴史は100年にすぎない。しかし、この100年の間に築地は大きく変化した。港湾機能が集中し名古屋港の玄関としての役割を果たしていたまちから、親しまれる港づくりをはじめ、市民の憩いの場としての役割を担うまちへ…。

まちはどんどん変わっていく。古いものがなくなり、人々の記憶からもその風景がなくなっていく。果たしてそれでよいのだろうか。

夢塾 21 では昔の写真を集める活動を行っている。その写真には人々の記憶に残るなつかしい風景がある。写真は記憶を呼び起こす1つの要素であるが、現在に残るものにも都市の記憶を伝えるモノがあるのではないだろうか。建物はその1つであるが、むしろ、日ごろはあまり気がつかないものにも、都市の記憶を伝えてくれるものがあるかもしれない。そんなものを探してみたい。

そのため、築地地区において様々な住民活動を展開している夢塾 21 のメンバーと一緒にまちを歩き、意見交換をすることによって、都市の記憶を伝えるモノを探し、その意味を考えることを築地地区における現地調査の目的とした。

(2) 調査の方法

現地調査にあたっては、夢塾 21 の塾長及び事務局長に対し、事前ヒアリングを実施し、都市の記憶を伝えるモノに関する話を聞く中で現地調査当日の歩くコースを設定した。

夢塾 21 の会議の場でメンバーに現地調査への参加を募り、さらに地区内の歴史に詳しい学区連絡協議会前会長にも参加してもらった。

現地調査では、夢塾 21 の方に案内してもらいながら、その場で質疑応答を行うとともに、その後、食事をはさんで夢塾 21 が作成中の写真集(なつかしの築港)を見ながら、意見交換を行った。

事前ヒアリング

| |
|---|
| 日時:2005年11月20日(日)9:30~10:30 参加者:建築学会(石田)、夢塾 21(松本、竹川) 内容:都市の記憶を伝えるモノをピックアップし、現地調査コースを設定 |
|---|

現地調査

| |
|--|
| 日時:2005年11月23日(水)10:00~14:30 参加者:建築学会(海道、石原、尾崎、松山、石田) 地元(松本、竹川、畑佐、山田、市川、高羽) 内容: 現地調査、意見交換 |
|--|

2. 築地地区の沿革

(1) 地図にみる築地の変遷

国土地理院 1/25,000 (図 4-3-1)

築地地区は国土地理院で地図が作成された以降に埋め立てによって生まれた地区であり、旧版地図を並べてみると地区の変遷がよくわかる。

最も古い旧版地図は 1891(M24)年測図のものであり、埋め立て前の状況を示している。

1920(T9)年測図をみると、1号地(北側部分)と2号地(南側部分)とその間に運河がある。ふ頭は中央ふ頭のみであり、当時は木製の棧橋だったらしい。市電、貨物線も通っている。

1932(S7)年修正図をみると、埋め立てによって西ふ頭が作られている。前の地図では空地であったところに倉庫などが作られている。

1947(S22)年修正図は第二次大戦直後の状況を示している。埋め立てによって中央頭、東ふ頭が作られている。

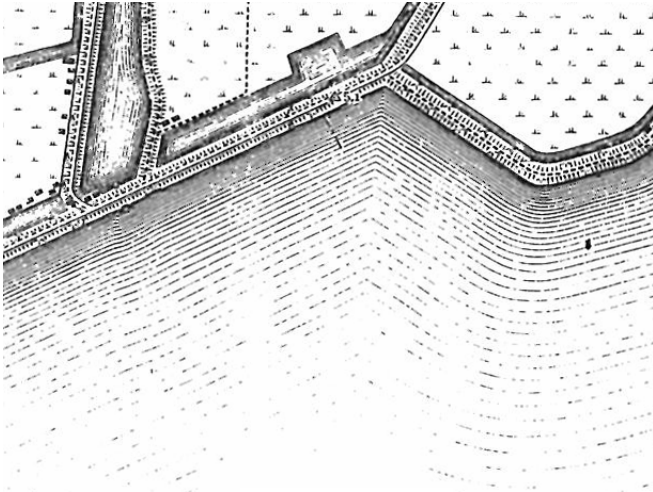
1968(S43)年改測図では、1・2号地間の運河の一部が埋め立てられている。市電はもうない。

最新の 2001(H13)年修正図をみると、中央頭と東ふ頭の間が埋め立てられ広場となり、西ふ頭が水族館に変わっている。貨物線が廃止されている状況がわかる。

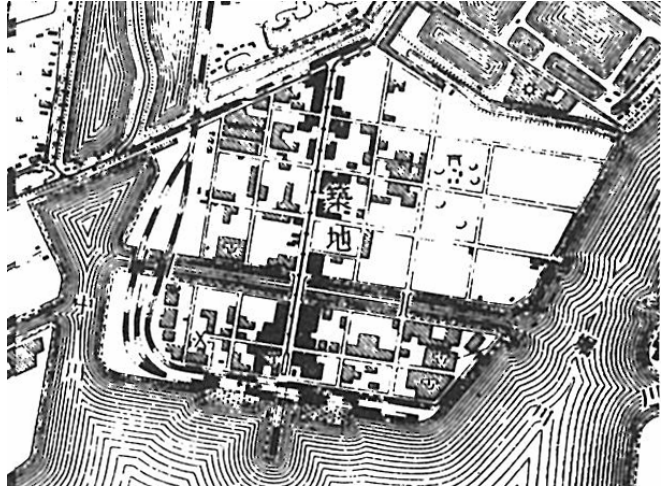
昭和 30 年住宅地図 (図 4-3-2)

名古屋市中央図書館に保管されている住宅地図の最も古いものが 1955(S30)年に発行されたものである。縮尺は正確ではないが、現在の状況と比較してみると、今も残る風景を読み取ることができる。

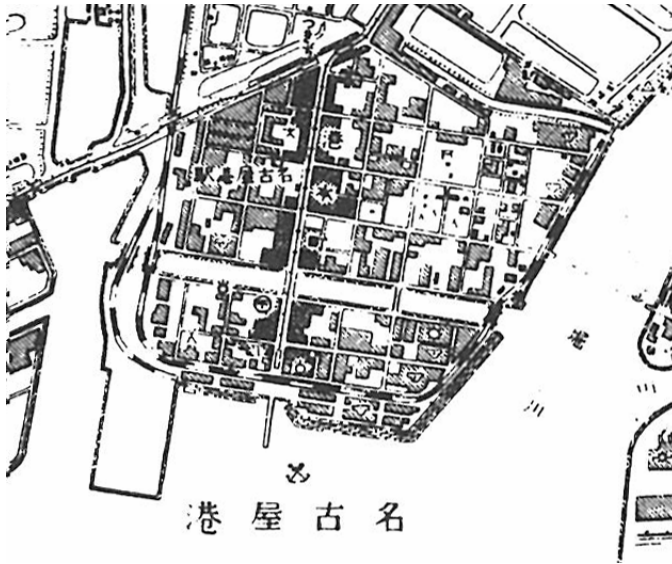
図 4-3-1 国土地理院の地図にみる築地の変遷



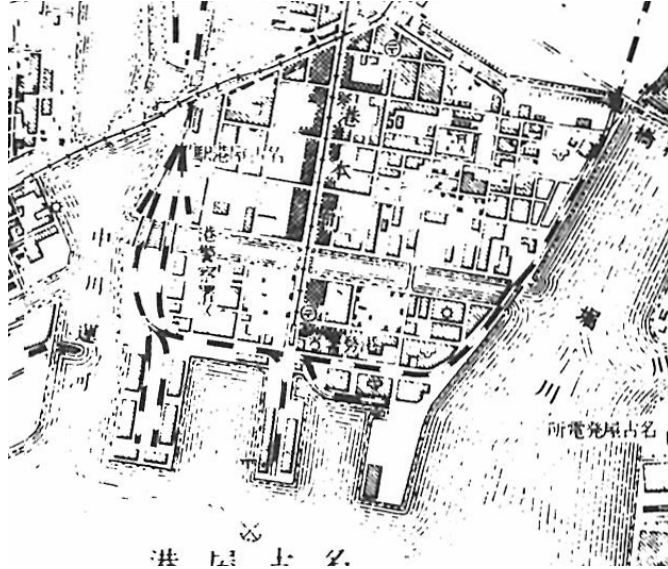
明治 24 年測図



大正 9 年測図



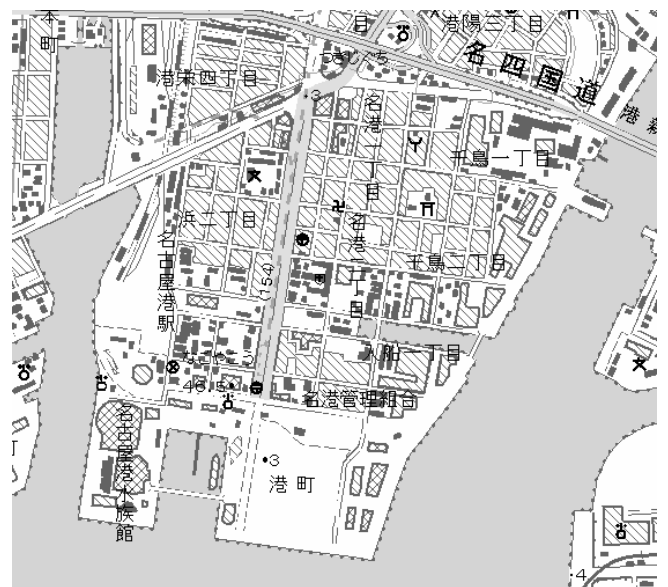
昭和 7 年修正図



昭和 22 年修正図

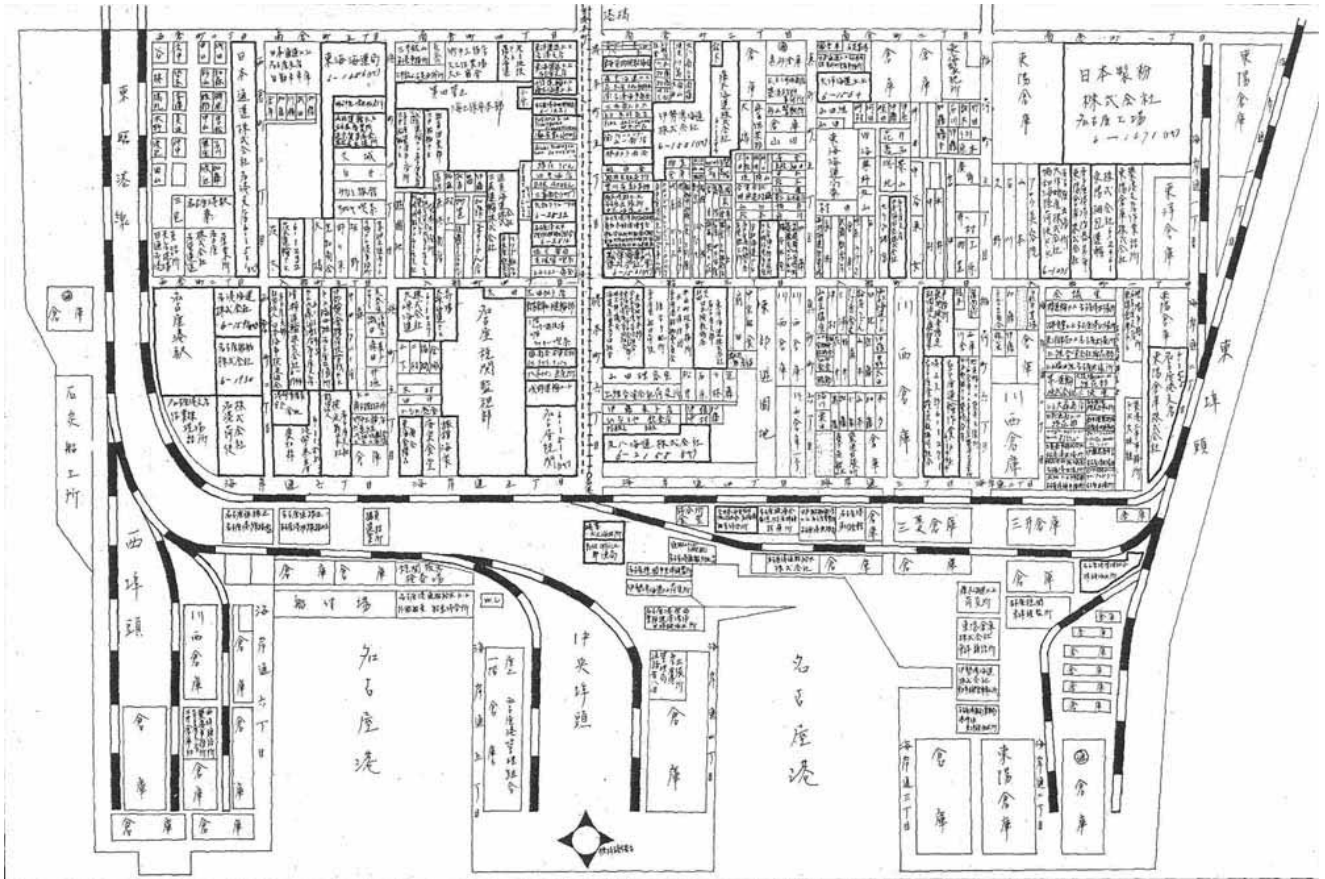


昭和 43 年改測図



平成 13 年修正図

図 4-3-2 昭和 30 年住宅地図



出典：「名古屋市全住宅案内図帳」 出版社：名古屋住宅協会 出版年：1955 年

(2) 築地地区でのエポックメイキング

築地地区の 100 年の歴史を振りかえるといくつかのエポックメイキングがある。各種文献や地元の話などをもとに 6 つをとりあげ整理する。

築港

江戸時代に宮の渡し（熱田～桑名）として使われた熱田港は、河川から流出する土砂で水深が浅くなっており、明治初期には 200～300t の船でさえ出入りが難しいほどになっていた。1896(M29)年に築港工事の計画を策定。総工費が膨大な金額となり、その大部分が埋め立てた後にできる土地を売ることでもかなうことになっていた。

当時は膨大な金がかかることから反対者が多数いたが、その頃、報知新聞社が開催していた「巡航博覧会」（3876 t という大きな巡回船を全国の主だった港湾に停泊させ、船内で博覧会を開くという催し）の巡航船ろせつ丸を工事中の港に入港させたり、大型汽船相川丸（1536 t）を石炭を積んで入港させることにより、反対派に工事の必

要性を見せつけたという。（参考文献 1）

15 年の歳月をかけて 1907(M7)年 11 月に開港。同年 6 月に熱田町が名古屋市に編入されており、当初熱田港とされていたものが、名古屋港と改称され、ここに築地の歴史が始まった。

市電の開通

名古屋市の市電は 1898(M31)年 5 月 6 日に開業（京都に続き日本で 2 番目）しているが、熱田駅前と築地口を結ぶ築港線の延長として、まず 1912(M45)年に港本町までが、さらに 1918(T7)年には、中央頭までを結ぶ区間が開通した。

名古屋港へは築港線と野立築港口線を経由する 2 つの系統が乗り入れ、名古屋駅前や栄町から直通電車が走っていた。港で働く人々の通勤の足として活躍したこの市電も、名古屋市の市電が全廃される 1974(S49)年より前の 1969(S44)年に廃止。2 月 19 日に「サヨナラ式」が名古屋港、築地口で行われたと記録されている。（参考文献 2）

汎太平洋平和博覧会

1937(S12)年に現在の港区役所周辺で開催された汎太平洋平和博覧会は、戦前に行われた博覧会の中では国内最大規模(会期 78 日間で入場者 480 万人)のものであり、名古屋港の発展に大きな影響を与えた。会場は当時沼地であったところを埋め立て 90ha の土地が生み出されるとともに会場への主要道路が整備された。会場跡地へは工場が誘致され市南部一帯の重化学工業化を一層すすめていくこととなった。

戦災復興

第二次世帯大戦は名古屋市に大きな被害をもたらしたが、築地も例外ではない。名古屋市戦災焼失区域図によると地区の大半が焼失したことになる。(ただし、焼失区域とされているところにも焼け残った建物があったようだ。)

このうちの一部が戦災復興区画整理事業の区域となり、道路や公園が整備された。夢塾 21 が再整備にかかわった稲荷公園もこの戦災復興区画整理事業の中で 1973(S48)年にできたものである。

伊勢湾台風

1959(S34)年 9 月 26 日に襲った伊勢湾台風により、築地地区も全域が水没する事態となった。今も当時の恐ろしさが語り継がれており、夢塾 21 の写真集にも多くの写真が集められている。築地地区の地盤は他よりも高かったことから水の引きは早かったようだが、住民が持っていた写真の多くも水浸しになってしまったという。

港湾機能の変化

名古屋港の後背地として繁栄してきた築地であるが、昭和 30 年代以降、船舶の大型化・港湾機能の拡大に伴い、沖合いで埋立造成が行われるにつれ、港湾機能は次第に 2 号地を離れていき、昭和 43 年金城ふ頭でコンテナ岸壁が供用運用されるに至り、2 号地の港湾機能は低下した。

この結果、築地から港湾労働者が減り、商業機能の低下、人口減少につながった。一方で、港湾

施設の跡地を市民の憩いの場にしようということで、ガーデンふ頭が整備され、港の様子は様変わりした。かつては、港湾労働者の働く場として賑わいをみせた街が、今では市民の憩いの場としての賑わいをみせている。

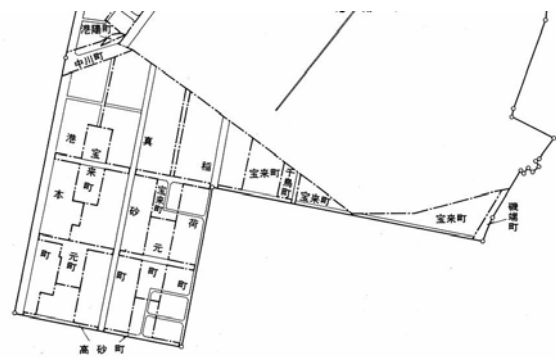
図 4-3-3 名古屋市戦災焼失区域図 (一部)



出典：復刻版 名古屋市戦災焼失区域図

図 4-3-4 戦災復興 (港第二工区の一部)

整理前



整理後



出典：名古屋市計画局発行「戦災復興誌」1984.3

3. まちづくりの取り組みと課題

(1) 行政のとりくみ

まちづくりの取り組みは、まず行政のとりくみから始まった。1980(S55)年に、名古屋市の総合計画の中で、築地地区が地区総合整備事業に位置づけられ、幹線道路の整備、沿道の再開発、背後地の住環境整備などまちづくりの総合的な取り組みが展開された。さらに、1990(H2)年には都市景観整備地区に指定され、海の玄関口にふさわしい顔づくりに取り組むようになった。

市民に親しまれる港づくりとして、ガーデンふ頭の整備を皮切りに水族館の整備など様々な施設整備もすすめられている。

(2) 住民のとりくみ

まちづくりの会の誕生

市民のまちづくりへの取り組みのきっかけとなったのは、再開発事業の実施に伴う地元組織として、1984(S59)年度にポートタウン1号地街づくりの会が発足したのがはじまりといえる。この会を母体として、2年後には築地地区全域の魅力あるまちづくりを考え、提案する組織として築地ポートタウン21まちづくりの会が発足した。

この会では、港橋広場の提案やラブホテル建設反対運動、まちづくりアンケートの実施などを行ってきたが、築地地区が福祉のまちづくりモデル地区に指定され、整備計画づくりが行われるとともに、1997(H9)年の世界都市景観会議にむけて、都市景観市民団体として、市から取り組みの要請があったのを受け、「福祉・景観」を中心テーマとした専門委員会(夢塾21)を発足した。

夢塾21の活動

当初1年間の活動として発足した夢塾21であったが、タウンウォッチングなどの取り組みを通じて、住民のまちづくりに対する関心が高まり、その後、稲荷公園の再整備計あたってワークショップを開催し計画案を提案(公園は「ゆめランド」という愛称がつけられ、維持管理のための愛護会が学区全体の手によって創設。年1回の「ゆめラ

ンド祭り」をはじめ、公園を活用した様々な活動が行われている)したり、旧防潮壁の修景計画を提案、さらにそれを実施するという活動を展開している。この中で、港のなつかしの写真を集めており、それを写真集とすることも計画している。

防潮壁の修景として夢塾21が行ったこと

- 子どもとアーティストによる絵
- ・アーティストが下絵を描き小学校5・6年生が総合学習の時間を使って絵を描く。2年毎に実施。3回目を2006年2月に実施。
- トリックアート
- ・緑区在住の画家にお願いし、だまし絵を描く
- 銘板の設置
- ・通りの愛称と防潮壁の由来、夢塾21の取組みなどを掲載。
- ギャラリー風写真展示
- ・港のなつかしの写真を収集。それを掲示。数年ごとに取替えを予定。2回目は2006年3月。
- 緑化
- ・つる性植物や花を植えたりしている。

(3) まちづくりの課題

西築地学区の人口は5,200人(2000年)とピーク時(1965年)に比べ半減しており、人口減少が続いている。また、小売業は、かつては港区で最も年間商品販売額が多かったが、2002年ではピーク時1985年の1/3に激減しており、1商店あたり年間商品販売額ではピーク時の58%にすぎない。全国の商店街と同様、その衰退が大きな課題である。

名古屋港には、水族館やイタリア村などの整備により、市民のレジャーの場として多くの人々が訪れているが、これらの人々はレジャー施設を訪れるだけで、地域への波及効果がない。まちに回遊性を生みだし、まちの活性化につなげていくことが求められている。

4. 都市の記憶を伝えるモノ

(1) 概要

都市の記憶を伝えるモノを整理するにあたり、地区の状況や住民の話、夢塾 21 によって集められたなつかしの写真などを踏まえ、表の 5 つの分類を行い、記憶に残る風景とともに、現在にも残るモノをピックアップしてみた。

まず第一に、当地区の特徴である港湾・産業に関わるものとして、沖合いの船や運河、港湾労働者の働く姿、貨物列車、倉庫やサイロが立ち並ぶ風景があげられる。これらの多くは失われてしまったが、意識的にモニュメントとしていくつか残されている。

第二に、このような港湾・産業を背景にしたまちの賑わいがあげられるが、これらも失われたものが多い。かつて港湾労働者を対象に多く立地していた飲食店も姿を消している。酒屋の一角に立ち飲みカウンターがあり、昼間から酒を飲んでいたという店も今はない。ビルの 2 階に「立飲」とある看板が当時を思いおこさせる。



江川線の拡幅により、江川線沿いにあった特徴ある建物もなくなってしまったが、その中で再開発においてモニュメント的に残された東海銀行の金庫は特筆できる。市電の風景もまちのにぎわいを象徴していたが、かつてここに市電があったということを示すものは 1 つもない。

第三に、生活・暮らしについては、名古屋港開港当時に建築されたと思われる長屋がいくつかあり、注目できる。また、浜地区に残る路地も古き時代のコミュニケーションの場であったことが偲ばれる。築地神社も多くの住民の力で維持されてきており、重要な空間といえよう。

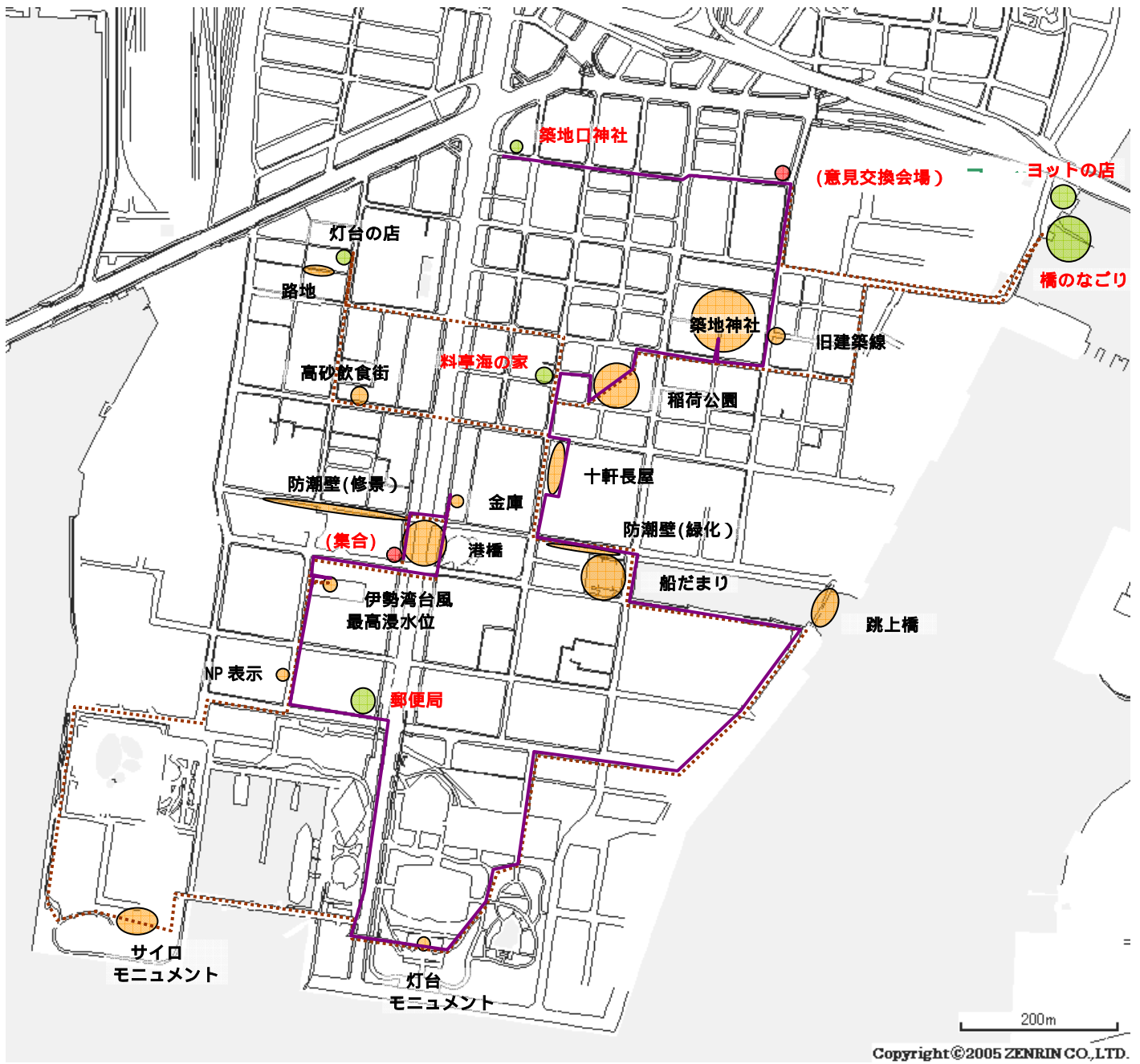
第四に、出来事・行事として伊勢湾台風が特筆できる。防潮壁はそのことを伝えるものとなっており、夢塾 21 の活動によって銘板が作られている。行事としては、地区住民の結束の場ともいえるみなと祭りがあげられるが、かつての様子を伝えるモノとしてはあげることができなかった。

第五に、まちづくりという観点から整理してみると、戦災復興で生み出された稲荷公園のほか、建築行政の変遷を伝える旧建築線のなごりをみることができた。

表 4-3-1 都市の記憶を伝えるモノリスト

| 分類 | 記憶 | 伝えるモノ |
|--------|-------------|----------------------|
| 港湾・産業 | 沖合いの船・運河 | 船だまり、港橋 |
| | 港湾労働者 | |
| | 灯台 | 灯台のモニュメント、灯台の形をした居酒屋 |
| | 倉庫・サイロ | サイロのモニュメント |
| | 貨物列車 | 名古屋港跳上橋 |
| にぎわうまち | 飲食店、立ち飲みの店 | 高砂飲食街 |
| | 江川線沿いの建物 | 再開発で残された東海銀行の金庫 |
| | 市電 | |
| 生活・暮らし | 住まい | 十軒長屋 |
| | コミュニケーションの場 | 路地 |
| | 行事 | 築地神社 |
| 出来事・行事 | 伊勢湾台風 | 防潮壁、伊勢湾台風最高浸水位、NP表示 |
| | みなと祭り | |
| まちづくり | 戦災復興 | 稲荷公園 |
| | その他 | 旧建築線 |

図 4-3-5 都市の記憶を伝えるモノ分布図



- 当初の予定コース
- 実際に歩いたコース

当初、事前ヒアリングで把握した都市の記憶を伝えるモノをざっとみて回るためのルート（約 5.4km）を設定したが、それぞれの場で話が弾み、実際にはコースをカットせざるをえなかった。

(2) 都市の記憶を伝えるモノ

船だまり

1・2号地間の運河は西側が埋め立てられたが、東側の運河は沿岸に倉庫があり、船の横付けが必要なことから埋め立てられずに残った。

写真は稲荷橋の西側の部分であるが、この部分については港湾業務のために水面が必要というわけではなく、親水空間を意識したものだろう。水に触れられる空間として整備することが望まれる。



港橋

1・2号地間運河にかかっていた橋。運河の埋め立てによって橋の存在意義はなくなったが、その形状は保全された。橋のたもとにある街灯は当時の写真をもとにデザインが復元されたという。

残念な点としては橋の欄干の隙間部分が欄干で埋められてしまったこと。これは防潮壁の役割を担うために埋めざるをえなかったということだが、現在はこの部分は防潮壁の機能は有しておらず、もとの形に戻すことが望まれる。



灯台のモニュメント

港の先端にあった中ふ頭灯台は港のシンボルといってもよい存在だったらしい。この灯台を撮った写真は多く、またいろいろな写真の中にその存在がみてとれる。ガーデンふ頭の造成に伴い、昭和55年に取り壊されたが、灯台の灯籠の部分がモニュメントとして残されている。

残念な点としては、かつてのシンボル性がなくなってしまったこと。港を眺める展望所に設置されているが、周辺からそのモニュメントに気づくことは少ない。



灯台の形をした居酒屋

中ふ頭灯台が地域のシンボルとして親しまれてきた状況を伝えるものとしては、むしろこの居酒屋の方が知られているのではないだろうか。この店の1階の窓には当時の写真も掲示されている。このような形での都市の記憶の伝え方もあるのだろう。



サイロのモニュメント

本サイロは戦後の食糧対策として政府が建設したもので 1955(S30)年に完成し、1994(H6)年まで使用された。昭和 40 年前後からの民間営業サイロの草分けとして意義があるものだとし、保存運動によって、一部がモニュメントとして保存された。直径 7.5m、高さ 28.15mの円筒が 12 本あったが、そのうちの 3 本が緑地施設の一部として活用されている。



この保存にあたっては、すべてを残すべきだという学識者や芸術家の意見に対し、地元住民からは「残す価値がない」「海からの水族館の景観を阻害する」等の反対の声もあり、その結果として一部保存という形になった。一見しただけではサイロとはわからないが、水族館に隣接するという立地条件からすると、全面保全よりはこのような形で残されたことはよかったのではないだろうか。

ただ、港の風景としてのサイロの景観は重要であり、現在地区内に残されているサイロについてはその形を伝えていってほしいと思う。



名古屋港跳上橋

名古屋港に陸上げされた荷物を運ぶ貨物線が築地地区を取り囲むように走っており、1・2号地間運河に可動橋が架けられていた。開通は 1928(S3)年。港湾機能の沖合展開に伴い、1980(S55)年に廃止された。

この跳上橋の姿も港の風景を伝えるものとして重要であり、1999(H11)年に登録有形文化財に指定されている。稲荷橋から眺める姿も勇壮だが、近くでみる姿もよい。



高砂飲食街

築地地区が多くの港湾労働者でにぎわっていた頃、彼らを対象とする多くの飲食店があった。路地に面する飲食街もあったというが、今はなく、当時の状況をわずかに伝えるのがこの建物である。高砂飲食街という名が示すようにこの狭い建物の中にいくつかの店があった。

今は空家となっており、失われつつある運命といえよう。



再開発で残された東海銀行の金庫

江川線が50mに拡幅される前、地域のシンボリックな建物として東海銀行があった。再開発によってその重厚な建物はなくなってしまったが、再開発においてその記憶をとどめておこうという意図のもとに、金庫が壁に埋め込まれる形で保存されている。



残念なのは説明が何もなかったため、見ただけでは単なる飾りに見えてしまうことである。

2003年に行われた@ポートでは、ここを活用したアート展示が行われたが、このような形でどんどん利用され、そのことが地域の歴史を語りつくすことにつながることを期待したい。



十軒長屋

築地地区には戦災の焼失を免れたと思われる長屋がいくつかあるが、その中でもこの長屋は10軒も連続しており、独特の景観を作っている。正面が2階建てで、奥が平屋というバンコ型。外観は様々であるが、この原因は、大家さんも3代く

らい代わっており、大屋さんが修繕するわけではなく、自分たちで屋根を葺き替えたり、店子が銘々改修しているからだという。(参考文献3)



路地

埋め立てによる基盤では約100m四方のスーパーブロック(約1.3ha)が形成された。これは倉庫等の大規模土地利用に対応した基盤割であったが、ここに労働者の住宅が立地するにあたり、路地がつけられた。密集住宅市街地整備促進事業では、これら路地を拡幅整備することを位置づけていたが、計画の見直しにより、一部の路地については拡幅されないこととなった。

密集市街地においては防災の点から道路は重要な役割を果たすが、下の写真のような路地の場合、防災上の問題は低く、車の入ってこない路地は人間味あふれる空間としての魅力がある。さらに、居住者の手によって、魅力あふれる空間となることを期待したい。



築地神社

各地から移住してきた人々の郷土意識や連帯感を高め、併せて港湾の安全と地区の発展を願って建設されたのが、築地神社であり、1938(S13)年に創建された。1944(S19)年に村社となったが、翌年の戦災により本殿と拝殿を焼失。直に仮本殿を造営し、同年12月に郷社となった。

多くの住民の寄付によって灯籠の奉納や修復工事が行われており、住民の心のよりどころになっていることが伺える。

なお、地下鉄駅近くに築地神社の碑のある神社があるが、こちらの正式名称は築地口神社である。



防潮壁

1959(S34)年の伊勢湾台風を契機に1・2号地運河の北側に防潮壁が作られたが、その後、運河の埋め立てと南側の2号地の宅地化に伴う新しい防潮壁の完成により、この防潮壁はその機能を失った。これを有効に活用しようとしているのが夢塾21の取組みである。



伊勢湾台風最高浸水位

伊勢湾台風では、名古屋港における最高潮位が5.31mとなった。当時、どのあたりまで水没したのかを示す標識が浜町公園に設置されている。

設置されたのは被災30年にあたる1989(H1)年。「伊勢湾台風の惨禍を長く記憶にとどめるため」と記載されている。被災直後ではその傷跡が多すぎ、30年たってようやく歴史として記録しておく意義が浸透したというところだろうか。



NP表示

江川線の電柱には当時の最高潮位の位置を示した印がついていたらしいが、江川線の拡張・電線類の地中化によって失われてしまった。その代わりではないだろうが、NP表示がされている電柱がある。これは伊勢湾台風を契機として作られた「名古屋市臨海部防災区域建築条例」において建築物の1階の床の高さに規制を設けており、それを確認するためにつけられたものだという。これも記憶を伝えるモノの1つとみてよいだろう。



稲荷公園

戦災復興で生み出されたのが稲荷公園であり、そのことを示すサインが設置されている。

みんなが土地を出し合って作った公園であり、その公園の再整備にあたり、みんなが意見を出し合い、そのことが地域の公園として親しまれるきっかけとなり、ゆめランドまつりなど大いに活用されるようになったのは歴史めぐりあわせともいえようか。



旧建築線

建築線とは旧市街地建築物法により道路幅員の境界線を法定建築線として用地確保した建築線であり、写真のようなその名残ともいえる道路の隅切りが地区内にいくつかあった。

この写真の向側では、現在の建築基準法に基づく2項道路によるセットバックが行われており、このような隅切りはない。建築基準法の変遷がみてとれる貴重な場所となっており、興味深い。



5. まとめ

築地地区の歴史は100年にすぎないが、灯台やサイロのモニュメント、港橋、跳上橋、東海銀行の金庫など、意識的に残されてきたものが多い点が築地地区の特徴の1つとしてあげられる。短い歴史の中でもまちは大きく変化しており、そのことがまちの歴史を何らかの形で残そうとしてきたのではないかとと思われる。

しかし、一方で失われてしまった風景も多い。港湾労働者で賑わっていた頃の風景、市電があった頃の風景など。市電については名古屋市の歴史を伝える上でも何かその記憶を伝えるモノを残したかったところである。

たまたま残されたというものもある。防潮壁がそれだ。その機能が失われ、不要となってしまったが、土留として使われていること、取り壊して別のものとする必要性がないことからそのままになっている。老朽化によって景観を阻害する要因ともなっており、取り壊してはという声もあったというが、それを夢塾21では修景し、防潮壁の歴史を記録としてとどめるとともに、昔の港の写真を掲載するなど、都市の記憶を伝える場として活用している。当初のきっかけは景観面であるが、それがまちのアイデンティティを伝える活動に広がったという点でも注目できる取り組みだろう。

築地地区には、都市の記憶を伝えるモノが多く存在していることがわかったが、これらは説明があってはじめてそのことがわかるものも多い。今後は、マップでの紹介やウォーキングルートの設定、説明板の設置など、多くの人々にそのことを知らせいくことが重要だ。夢塾21の次の活動として期待したい。

参考文献

- 1:名古屋市制100周年記念誌編集委員会編「なごや100年」1989.10
- 2:徳田耕一編著「名古屋市電が走った街 今昔」1999.10
- 3:瀬口哲夫「港の十軒長屋」名古屋市港区、愛知の建築 2005年8月号